

## 【流域文化圏形成の研究 III】

## 越後から上州へ渡った飯盛女と八木節

齋藤 百合子

## はじめに

本稿は明治学院大学国際学部付属研究所の共同研究「流域文化圏形成の研究」による調査研究の中間報告である。筆者は2013年8月に利根川流域のフィールド調査チームに参加した。フィールド調査では、利根川の下流（千葉県）から上流（群馬県）にできるだけ利根川に沿う道路を探しながら、実際の河岸跡を探し、歴史や習俗を知るために博物館で歴史資料等を確認した。一級河川の利根川は現在、千葉県と茨城県の境から太平洋に注いでいる。しかし、利根川は江戸時代に、東遷と関連河川における流路の付け替えの「瀬替え」と呼ばれる大改修大規模な開発工事が行われていた。越後、信州、甲斐など内陸の米や雑穀、絹、綿などが下り荷として江戸へ運ばれ、江戸からの上がり荷として塩や藍、お茶、ぬか、海産物、陶器、小間物などが交易されていた<sup>1</sup>。そして利根川は明治に鉄道が開通するまで、河岸という川の港が点在し、物資の取引と宿場の要素を兼ね備えて、人、物、金が行き交いする江戸と地方を結ぶ主要な交通路としての役割を果たしていた。

本共同研究の目的は、河川の舟運、河川に向けた街道、河川と海路の舟運の接合など、人と物と文化が行き交い、共通の文化が醸成される流域文化圏を、地域に残っている「基層文化」から考察しようとするものである。本共同研究を通じた私の関心は、利根川舟運において越後、信州、甲州の物産が集積し、人と物が行き交っていた利根川流域上流の烏川沿いに在った群馬県高崎市の倉賀野および木崎の「飯盛女」と呼ばれる女性たちと、現代に伝わる民謡「八木節」にある。中間報告では、越後から上州への若い女性たちの奉公が、越後が源流と言われる八木節という謡曲の発達に寄与したとの仮説を考察してみたい。

## 1. 利根川と舟運

## (1) 利根川の大開発事業「瀬替え」

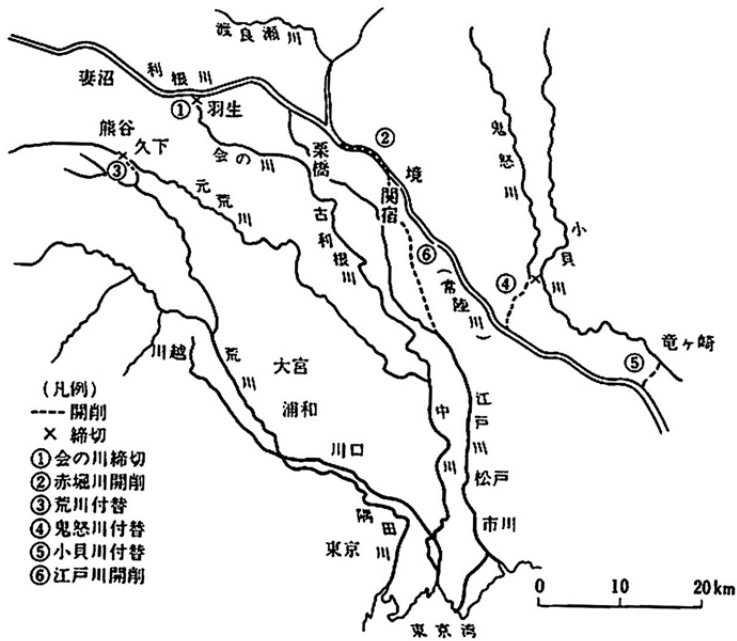
現在の利根川は、群馬県のみなかみの三国山系の大水上山が源流で、群馬県内の前橋市や高崎市付近を南下した後、長野県に源を発する烏川と合流し、群馬県と埼玉県との境と茨城県と千葉県の間を経て、銚子付近で太平洋に注いでいる。

しかし、400年前、江戸時代に関東平野を流れる主な河川は現在とまったく様相が違う。国家統一を果たした江戸幕府は利根川の東遷を果たすべく、関東地方の主な河川を閉めたり、新たに開削した「瀬替え」と呼ばれる大工事を行ったからである。この「瀬替え」の目的は、①埼玉平野（古利根川合川）の開拓、②東北伊達藩に対する防御、③江戸への河川舟運の航路開発、④江

戸の水害防除と言われている（高崎経済大学付属産業研究所 1991：29）。この「瀬替え」は、大きく3つの埼玉平野中央を流れていた利根川を渡良瀬川筋に合流させ、栗橋から境までの約7キロの赤堀川を掘削して、常陸川筋へ付け替えた。この工事により、渡良瀬川は利根川の支流となった。また鬼怒川と小貝川は分離され、それぞれ付け替えられて利根川の支流となった。また、利根川の支川であった荒川は、熊谷付近で南に付け替えられ、利根川と分離された。さらに、利根川の支流だった会の川を閉切り、関宿から南に14キロ掘削して太日川につなげ、松戸や市川を通過して江戸への舟運に大きな役割を果たすようになったために、後に江戸川と呼ばれるようになった（前掲 27-28）。それまでたびたび水害被害にあった江戸は水害防止が可能になっただけでなく、利根川流域地域の農業発展にも寄与することができた。

とくに幕末の江戸時代の舟運の発達によって、大規模な消費地への流通と販売を可能とし、各地で特産品の生産や製造を促進した。たとえば、綿織物の「真岡晒」が下野国（現在の栃木県真岡市あたり）の結城、下館、真壁で、お茶「猿島茶（さしまちゃ）」が関宿藩の領内特産物として生産が奨励されていた<sup>2</sup>。とくに「猿島茶」は幕末の関宿藩の猿島に生まれた中山元成と野村佐平治らによって品質改良、江戸市場へのマーケティング、そして1854年日米和親条約締結直後のアメリカ市場へ日本で初めて輸出されている<sup>3</sup>。さらに銚子や野田では舟運で集積される大豆を加工し、江戸やそのほかの大規模市場への輸送販売を可能とした醤油醸造業<sup>4</sup>も発達した。

近世初期の利根川及び関係河川の付替え図



## (2) 利根川流域の舟運と河岸で働く人々

### ① 「河岸問屋」と「船問屋」と船で働く労働者

河岸とは川の港の機能を果たすもので、関東各地の利根川水系には元禄時代には 80 あまりの河岸が知られ、幕末には 300 あまりの河岸があったと推定される（川名 1982 : 11）。『河岸に生きる人びと』を執筆した川名は、河岸で生計を立てる人々とその社会関係にも焦点をあてた。河岸でもっとも中心的な役割を果たしていたのは、船を持ち、年貢米輸送に関わることが多い有力農民で、「河岸問屋」や「船問屋」を営んでいた（前掲 106）。「河岸問屋」は同時に各地から運ばれてくる産物を船荷まで一時的に保管する倉庫の役割を兼ねていただけでなく、船持問屋とよばれる江戸廻りの大船の持ち主でもあり、旅籠屋も同時に営むなど多角経営をすることが多かったようだ（前掲 117）。こうした「河岸問屋」では河岸で地方から運ばれた荷物を降ろし、倉庫や船に運ぶ「小揚人足」「日雇人足」と呼ばれる労働者が働いていた。さらに「船問屋」では、船を所有する「船問屋」のほかにも、船を所有する大船持、小船持があった。零細の小船持は江戸廻りの大船ではなく、筋下船などの小舟を所有して操業していたが、貨物も旅客も土地の有力者であった船持問屋がほぼ独占する状態だった（前掲 129）。実際に船を操縦する船頭には、船を所有する船頭だけでなく、雇われ船頭もいた。また、船の乗組員は「水主」と呼ばれ、年齢を問わず7年間の奉公後にようやく入札で高い給金を提示した船持の元で働くことが認められるが、1年契約で、その期間中は不満があっても勝手に雇用主を変えることはできない身分だった。低賃金で借家住まいを余儀なくされる厳しい封建的な身分制だった（前掲 130-131）が、雇船頭や「水主」の中にはわずかな給金を貯えて船を買って独立した船持となるものもあったという（前掲 142）。

### ② 河岸の女たち—飯盛女と奉公人契約

上記のような河岸の問屋やその人足として、また船上で働く職種の中にどのくらいの女性がいるのかという記録は乏しいが、河岸は、「洗濯女」とか「船女房」、また「飯盛女」などと呼ばれて女性たちが働いていた。しかし、河岸の労働を支えていた河岸労働者は、ほんの一握りの問屋や大船持の支配下にあり、妻を持たず、零細な生活に甘んじなければならなかったが故にこうした女性の職業が成立したと考えられている（榎本 1992 : 66）。「洗濯女」や「船女房」の仕事の内容は「遠方から来た船が河岸に着くと、小舟に乗ってこぎ寄せて来て、船頭との交渉がまとまると、船に上がって船の中の掃除や洗濯、綻びの縫いなどまでして、一夜を過す。翌朝は朝食を作り、船中をきれいに掃除して船から下り、名残を惜しんで別れて行く」（川名 1982 : 156）といったもので、家事労働と性労働（買売春）が結びついた形態だったようである。潮来や銚子への遊山客の通過地点になっていた木下河岸では遊女を召し抱えた船頭小宿が設けられ、本城や松岸の廻船洗濯宿は遊郭に発展した（榎本 1992 : 67）。

そのほか、奉公契約によって抱え主に拘束され、恒常的に売春を強いられていた「舟饅頭」「びんしょ」「夜鷹」「惣嫁」などと呼ばれた女性たちもいたようだ。小舟に2、3人の女性を乗せて停泊中の舟にこぎ寄せて客を引かせ、屋外や舟の中で売春を行う私娼と呼ばれるこうした女

性たちの抱え主の多くは、無宿人ややくざ、また下層都市民になることが多かったという（曾根 2003 : 195）

また宿場としての機能も果たしていた河岸の旅籠屋では「飯盛女」が、宿場の旅客を相手に遊興と売春していたと記されている（五十嵐 1981、宇佐美 2005、下重 2012）。「飯盛女」は、いろいろな言い方がなされる。「船女房」も「飯盛女」と呼ばれることもあり、そのほかにも「食売女」や「宿女郎」などと呼ばれることもあった。利根川舟運の船頭の舟歌には、夜を共にした女性たちを想う船頭たちの甘酸っぱい思い出が歌詞にこめられていることも少なくない。

#### 潮来曲の歌

柳よやなぎ直なるやなぎ  
いやな風にもなびかんせ  
いたこ出じまの十二のはしを  
行きつ戻りつしあん橋  
戀にこがれてなくせみよりも  
なかぬ蛍が身をこがす  
いたこ出島のまこもの中に  
あやめ咲くはつゆしらず  
君は三夜の三日月さまよ  
宵にちらりと見たばかり  
『利根川図誌』より

#### 倉賀野河岸

惚れても無駄よ 宿女郎  
俺ら船頭 川風まかせ  
大杉神社様の 石段で  
哭いて手を振る 可愛い娘  
紅い蹴出しが 眸にしみる  
雁も鳴いてる 城の跡

男性である客としての船頭が、夜を共にしたであろう「宿女郎」を思った歌詞はロマンチックな響きがある。しかし、「宿女郎」や「飯盛女」と呼ばれる女性たちは、故郷の親元を離れ、奉公人契約で自由を制限されていることが多かった。どのような思いで男性客をとり、見送っていたのだろうか。

奉公人契約とは、身分制と家父長制が強化された江戸時代にあつて、さらに女性を抑圧する契約制度だった。下重の研究によれば、年季奉公人契約において、奉公人となる女性本人はこの契約の当事者ではなく、客体化され、人主と請け人と雇い主の間で交わされた。つまり、女子は奉公に行きたくなくても、親や家長（＝人主）の決定に従わざるを得なかったのである。請け人は

人主以外の成人男性に限られた。請け人の役割は、奉公人の身元を保証し、奉公人が問題を起こした際の弁償・弁済義務を負うことである。身元の確認、宗教檀家、年季期間と給金の授受、奉公業務の条件、有事の際の人主と請け人による弁償・弁済義務などを記した契約書「請け状」が雇い主に渡された（下重 2012：149-152）。宇佐美は越後の蒲原から 21 年の年季で「身売り」された 8 歳の少女の「請け状」ほか、何人かの女性の「請け状」の事例（宇佐美 2000：110-113）から、逃げたり、病気になったり、自殺などすればすでに家族に支払われた給金は返済しなければならないだけでなく、逃亡先を追跡した費用が上乗せになる仕組みであること、飯盛女・下女奉公は「給金」という言葉が使われていても「労働」の報酬ではなく、人身の年季身売りであることは否定できない、としている（前掲 150）。奉公という名の人身の身売り、つまり売買が公然と横行していたのである。奉公に行く当事者の女性が奉公を拒否することも、逃げることも、雇い主を変えることも、重病になっても、たとえ命を落としても簡単には故郷に戻ることもできない契約内容になっていた。雇い主は、奉公という名の下で奉公人の心身と移動の自由を制限し、一方で性サービスを含めた業務に奉公人を従事させていた。

江戸時代に公娼制が確立したことは知られている。では、飯盛女や河岸で性サービス（売春）を含む就労はどのようにとらえられていたのだろうか。また、江戸時代初期には、人間の売買を禁ずる人身売買禁止令が発令されたにもかかわらず、なぜ公娼制や奉公という名の人身売買の行為が制限されなかったのだろうか。

### ③ 江戸時代の買売春の構造と河岸における買売春

『娼婦と近世社会』を記した曾根は、近世の売買春の構造において、1) 遊郭に封じ込まれた公娼、2) その周縁に位置する飯盛女、茶立女など、下女や奉公人の名目で人数を制限されて公許された準公娼、3) 非公認の娼婦（私娼）、4) 別の生業の傍ら自らの意思で売春を行う者、の 4 つの売買春の形態に分類した（曾根 2003：198-199）。

河岸でおこなわれていた買売春は、上記の 2) の準公娼と、3) の私娼であろう。いずれも公娼制度の周縁におかれている。準公娼とする所以は、天保 3 年（1718）に幕府が売春を行う女性（食売女）を旅籠屋 1 軒あたり 2 人まで置くことを許可するとの覚<sup>5</sup>によるものであろう。また公娼や準公娼のカテゴリーに入らない、さらに周縁に置かれた私娼は、自らの意思で売春しているのではなく、多くが抱え主付きの奉公女性らである可能性を曾根は示唆している。（前掲 195）。しかし、公娼と準公娼以外の買売春は江戸時代には禁じられており、発覚すれば処罰の対象となる危険を含んでいた。実際、遊郭と呼ばれていた木下河岸の船頭小宿や旅籠屋では、1 軒あたり 12、13 人の女性を連れて来て遊興や買売春を目的とした店を開店し商売をする者があったが、1826 年に摘発され、女性を含む関係者が逮捕され、奥州送りの処分がくだされたという（川名 1992：169）。奉公に出された先の雇用主に翻弄された女性たちが奥州送り、つまり流刑の処分が下された後、女性たちがどのような人生を送ったのかを記す資料や文献は極めて少ない。

## 2. 倉賀野河岸と木崎宿における越後出身の女性たち

次に、こうした周縁に置かれた女性たちが越後から上州へ謡曲を伝えたのではないかとの仮説

を、河岸と街道の要衝である宿場町がある倉賀野および木崎に焦点をあてて考察してみたい。

(1) 倉賀野河岸と木崎宿の女性たち

利根川のもっとも上流にあると言われる烏川沿いの倉賀野は、江戸時代は信州や甲州そして越後から農産物や物資が集積され、中山道の途中にあり、また日光例幣使街道<sup>6</sup>の起点でもあって栄えていた。さらに北は渋川、沼田と経て三国峠を越えて十日町に至る三国街道によって越後地方と結ばれており、水路、陸路双方の交通の要所であった。倉賀野では本陣の勅使河原、脇本陣の須賀庄と須賀喜は河岸問屋を兼ね、町全体が繁栄した(榎本 1992: 120)。

とくに信州からの荷物は、中山道での関所の通過や武家荷物優先などで時間と費用がかかるため、中山道を通らずに、わざわざ和美峠や志賀峠を通して上信国境の山を通過して下仁田に降り、下仁田河岸から鑄川の舟運で倉賀野河岸や藤岡河岸に運んだこともあったという(前掲 15-16)。



現在の倉賀野はそうした賑わいを回想することができないほどひっそりとしているが、利根川にかかる共栄橋の麓の倉賀野河岸があった場所に建てられている「倉賀野河岸由来」の記念碑には、倉賀野河岸の繁栄の様子が、次のように書かれている。



撮影は筆者



撮影は筆者

### 倉賀野河岸由来

当河岸は江戸時代初期より利根川の最上流河岸として上野、信濃、越後の広大な後背地を控え、江戸との中継地として繁栄を極めたり。

三国の諸大名、旗本の廻米を初めたばこ、大豆、葦板等の特産物は碓氷、三國両峠の嶮を牛馬の背で越え、当河岸より江戸へ、また帰り舟には、塩、干魚、荒物等の生活必需品や江戸の文化を内陸地へ伝え、その恩恵に浴さしめぬ。

元禄時代の最盛期には上り荷物三万駄、下り荷物二万二千駄を数え、舟問屋十軒、舟百五十余艘に達し、十四河岸組合の最河岸となる。然るに明治十七年高崎線の開通によりその使命終わりぬ。時移り川の流れも変わり往古の繁栄は昔の夢となる。われら有志当時を偲びてこの碑を建つ。

昭和四十九年甲寅年十月吉日

大山正撰文

前沢辰雄河岸著者

根岸政雄謹書

また、倉賀野の井戸八幡宮には「倉賀野河岸」の歌の碑がある。地元の歌手がこの歌を歌っているとのことだ。

### 倉賀野河岸<sup>7</sup>

作詞 曾根松太郎 作曲 矢島ひろ明

1. 八幡様の御神鈴の  
音まで賑わう 倉賀野河岸よ  
船乗りたちは、無事祈り  
夜明け一番 舳網を解く  
晴れて出船の 掛け声たかく  
江戸に舳先を 向けて出帆
2. 惚れても無駄よ 宿女郎  
俺ら船頭 川風まかせ  
大杉神社様の 石段で  
哭いて手を振る 可愛い娘  
紅い蹴出しが 眸にしみる  
雁も鳴いてる 城の跡
3. 江戸へは三日 烏川くんだり  
上りは十日と 加えて七日

信州 越後 甲斐の米  
積んで戻り荷 赤穂塩  
始発湊は 終着湊  
河岸の倉賀野 江戸の華

平成十二年十月吉日

曾根松太郎 建立 歌 高橋龍治

倉賀野河岸および倉賀野宿の繁栄の裏で、歌詞の2番にあるように、倉賀野の籠屋は十数軒あり、飯盛女とか宿女郎と呼ばれる女性たちが置かれて客の相手をしていた。そして倉賀野の飯盛女たちの出身地は、そのほとんどが越後の出身だった。倉賀野の九品寺には、飯盛女のものと思われる墓塔が三基あり、その中の1基には清水屋という店で働いていたと思われる4人の女性の出身地と名前が刻まれている。4人とも越後の出身だった(榎本 1992: 124)。清水屋以外にも倉賀野の和泉屋や鍵屋清兵衛の墓塔にはそれぞれたき(長岡出身)、きよ(蒲原出身)の女性の名が刻まれている(前掲 榎本 151)。また二次資料にはなるが、『新田町誌』から榎本は、倉賀野から日光例幣使街道4つ目の宿場である木崎宿の飯盛女の越後出身者数と出身地を抜き出した。その資料によれば、木崎宿の飯盛女33人のうち17人が越後出身で、蒲原と三島のいずれかの出身者であった(前掲 榎本 152-153)。

## (2) 越後出身の女性たち

なぜ越後出身の女性が多かったのか。越後の蒲原および三島を現在の地図で確認すると新潟県長岡市は信濃川下流の越後平野にあたり、江戸時代や明治、大正時代にしばしば洪水が発生しやすい土地であったようだ(前掲 榎本 154)。土木学会関東支部新潟会ホームページの「にいがた土木構造物めぐり」には信濃川下流の越後平野は、日本海側の西側に弥彦山、門田山などの丘陵地帯や砂丘地帯で日本海に流れ出ることができない地形的な条件から、洪水による被害が発生していたと記されている。平時でも越後平野は水はけが悪く腰まで浸かる深田での農作業であり、洪水被害はさらに農家を悩ますものだったという。このため、江戸時代中ごろより、現在の燕市分水地区から日本海に向けて人工河川を造り、信濃川の水を日本海へ流す分水計画の必要性が地域の人々により何度も幕府等に訴えられていた<sup>8</sup>。その分水計画は、1922年(大正15年)によりやく大河津分水が完成し、現在にいたる新潟の米どころとして米作を可能としたが、それまではしばしば洪水が発生していた。そのなかでも江戸時代中期の1742年(寛保2年)には「戌の満水」と呼ばれる洪水が千曲川や信濃川流域に甚大な被害をもたらした<sup>9</sup>。水害とその後もなかなか水がはけない湿地状態、そして天候不良による飢饉<sup>10</sup>も、蒲原や三島の農民たちを苦しめていたであろうことが推測できる。貢を納められない小農は娘を身売りせざるを得なかったのではないだろうか。

蒲原地域での洪水等が原因で身売りをせざるを得なかった女性を歌った「蒲原口説」が越後地方で歌われていたという(榎本 1992: 160)。



蒲原口説

越後蒲原 ドス蒲原で  
 雨が三年旱りが四年  
 出入り七年困窮となりて  
 新発田様へは御上納ができぬ  
 田畑売ろうか子供を売ろか  
 田畑は小作で手をつけられる  
 姉はちゃんかで金にはならぬ  
 妹売ろうと相談きまる  
 妾や上州行ってくるほどに  
 さらばさらばよお父ちゃんさらば  
 さらばさらばよお母あさんさらば  
 まだもさらばよ皆さんさらば  
 新潟女衞にお手てをひかれ  
 三国峠のあの山の中  
 雨はしょぼしょぼ雉ン鳥は鳴くし  
 やっと着いたは木崎の宿よ  
 木崎宿にもその名も高き  
 青木女郎屋というその内で  
 五年五か月五五二十五両  
 長の年季を一枚紙に  
 封じられたは口惜しうもないが  
 知らぬ他国のペイペイ野郎に  
 二朱や五百でだきねをされて  
 美濃や尾張のいも掘るように  
 五尺のからだの真ン中ほどに  
 鋤を持たずに掘られたが口惜しいなあ

後半の、客をとる行為がいも掘りに例えられたユーモアとたくましさと哀しさが入り混じった表現が悔しさを表している。

この「蒲原口説」は、木崎に渡って、飯盛女たちに「木崎節」として歌われていた（宇佐美 2005 : 132-134）。「蒲原口説」と「木崎節」は「越後蒲原ドス蒲原で 雨が三年旱りが四年」あたりから終盤までほぼ同じ歌詞である<sup>11</sup>が、「木崎節」には、木崎にある色地蔵のことが加えられ、そして口惜しさの表現は「いも掘り」の部分が消えて、「一枚の紙切れ」に変わっている。身なりを整えて客をとる女性たちに「いも掘り」表現はあまりにも直接的すぎたのかもしれない。

木崎節（民謡に歌われた飯盛女）

木崎街道の三方の辻に  
お立ちなされし色地蔵さまは  
男通ればにっこり笑う  
女通れば石とって投げる  
（国は）越後蒲原トス蒲原で  
雨が三年、日照りが四年  
出入り七年困窮となりて  
新発田様へは御上納ができぬ  
田地売ろかや子供を売ろか  
田地は小作で手がつけれぬ  
姉はジャンカ（不器量）で金にはならぬ  
妹売ろとの御相談きまる  
妾しゃ上州へ行ってくるほどに  
さらばさらばよお父さんさらば  
さらばさらばお母さんさらば  
新潟女衞にお手々をひかれ  
三国峠のあの山の中  
雨はしよぼしよぼ雉るん鳥や啼くし  
やっと着いたが木崎の宿よ  
木崎宿にてその名も高き  
青木女郎屋というその家で  
五年五か月五二十五両  
永の年季を一枚紙に  
封じられたはくやしはないか

そのほか、越後の女性たちが身売りを余儀なくされた要因のひとつに、失明という風土に関係した病気もあったのではないだろうか。越後には越後ごぜと呼ばれる視覚障害がある女性のプロの芸能集団が、上州など旅回りしていた。筆者はかつて、『光に向かって咲け一斎藤百合の生涯』（岩波新書）を執筆した新潟県出身の視覚障害者である粟津キヨ氏に失明の原因を訪ねたことがある。粟津氏は、「新潟県は雪深く、雪の白さや紫外線で眼を痛めやすいのです。また、昔は栄養失調が失明の原因になることが多かった。貧しさからくる栄養失調は、高田ごぜなど視覚障害者たちが生まれる要因にもなっていたんです」と話してくれたことがある。医療技術も保険制度も、そして医療機関も未整備だった江戸時代、家族にひとりでも病人が発生すると、なんとか病気を治してあげたい家族の努力は家財を使い果たし、さらに借金を増やし、貧農にとって重い負担がのしかかっていただろう。

越後の貧農の状況は現代の開発途上国の現状と酷似している。1990年代初頭、日本で稼ぐこ

とを夢見てタイからやってきた女性たちが言われもない約 350 万円の借金を課せられて、売春を強要された人身売買がまかり通っていた時期があった。筆者は 50 人以上のタイ人女性たちに来日の経緯などをインタビューしたことがあるが、子供に重い先天的な疾患があり手術が必要な場合、親が病弱で入院や手術などの治療が必要な場合、家族のメンバーが事故等で障害を負って働けなくなる、シングルマザーとなってしまう子供を養育しなければいけないなどの、社会保障制度が整備されていないために発生する経済的な理由が来日のきっかけだったことが少なくなかった (Human Rights Watch 2000)。

### 3. 越後の謡曲と八木節

木崎節が越後出身の女性たちに歌いつがれて日光例幣使街道沿いに広がっていったことは、群馬県太田市のホームページでも記されている<sup>12</sup>。戦前までは木崎節として盆踊りなどの時に歌い、踊られていたという。この木崎節は手ぬぐいで頬かぶりし、うちわで顔をかくし、「雨が三年日照りが四年」と囃子に合わせて唄われ、一節歌うことに一廻りして次の文句を歌う流調な節回しだった。日光例幣使街道通行の際に大勢の若者が宿泊を余儀なくされ、旅籠屋ができ遊興の地となり、越後から多くの子供が奉公という名目で身売りされ飯売女として苛酷な生活を強いられていた。彼女たちはこのさびしさから、故郷や家族をしのび、宴席で子供の頃覚えた歌を歌ったのが木崎節の始まりと言われている、との内容を記している。木崎節は戦後木崎音頭と呼ばれている。現在、木崎音頭は群馬県太田市指定重要無形民俗文化財に指定されている。

さらにこの木崎節にまつわるいくつかのエピソードがある。木崎節は、その後、日光例幣使街道を伝わり、八木宿場 (現栃木県足利市) の元唄であること、そして木崎節や八木節の元唄は新潟県十日町市に現在にも伝わる新保広大寺節であること、視覚障害女性たちの芸能集団の越後ごぜたちが、三国峠を越えて南下し、中山道や日光例幣使街道、甲州路を謡歩き関東地方に南下して、謡い継いでいき (佐久間 1983、鈴木 1996)、「八木節」や「舟屋唄」のルーツに変じていったことなどである<sup>13</sup>。

倉賀野や木崎、そのほか河岸や日光例幣使街道沿いの宿場で飯盛女として働く越後出身の女性たちが、越後ごぜが歌う謡曲を聞くことがあったかもしれない。越後出身の飯盛女たちと越後ごぜにはどのような交流が直接的、間接的にあったのかという資料は残念ながら手元にはなく、推測の域を出ないが、飯盛女たちの心からの悲哀を越後ごぜたちが受け止め、歌い継いでいったのではないだろうか。

現在の八木節は、明治初期、八木宿の近くの朝倉で運送業を営む清三が八木宿から太田宿を経て木崎宿の間を往来しながら馬のひづめの足音を伴奏に唄った盆唄が、いつしかテンポが良い馬方節調に変わっていき、街道筋で評判となった。そして明治後半、この馬方節を盆踊りが好きな足利生まれで隣村同士の堀米源太と矢場勝が明るくテンポのよい節で歌い上げ、上京して歌手としてレコード化して全国に広がったものが現在の八木節となっている<sup>14</sup>。矢場勝はのちの歌手コロンビア・ローズの祖父であるという。

## 結論

利根川水系のフィールドワークに出かけ、利根川と烏川が合流する手前の倉賀野を訪れたとき、川の流れは静かで、倉賀野河岸跡もあまりにひっそりとしているのに、なぜかもっと佇んでいた、もっと知りたいという考えが沸いてきた。そしてフィールドから帰ってきてから、インターネット、書籍、さまざまな資料で新たなフィールドワークが始まった。利根川水系の最上流の河岸、そして舟運の水路と信州、甲州、越後への陸路が行き交う町、さらに日光例幣使街道の起点という、さまざまな人と物と文化が交差していたこの土地をきっかけに、なにかしら流域文化圏を形成しているのではないかと考えたのである。そして、それを河岸や宿場で働く女性たちに焦点を当てて考えようとした。

調べていけばいくほど、主に越後から奉公という名で身売りされ、男性客の性の相手をしなければならなかった飯盛女とか宿女郎とか船女房とか舟饅頭など、女性の人格を無視した呼称で働く女性たちのことが浮き彫りになってきた。しかし同時にどうして越後の女性が多く奉公に来なければならなかったのか、人の移動の背景や要因についての分析は十分ではなかった。本稿では、越後の女性の上州への移動は、飢饉や家族の病気が危機的な状況になる小農の貧困と、江戸時代の舟運の発達の中にも身分制や家父長制、そして周縁化された準公娼制が背景にあることを明らかにしようとした。その上で、越後ごぜという芸能集団の存在が周縁化された女性たちの心情と響きあい、それぞれの想いがこめられた木崎節や八木節などの歌謡となって群馬、栃木、埼玉など関東地方に、流域文化として浸透してきたことを考察した。

軽快で明るく、歯切れのよい八木節は、埼玉県に近い東京北部の筆者の実家の盆踊りの時にいつも聞いていた馴染み深い民謡だった。その八木節は、新潟から群馬、そして栃木、埼玉へ、ごぜや飯盛の女性たちが思いを込めて歌い継ぎ、形を変えながらも昭和にはレコードという発達した技術で現代に伝えられている。河川や街道が北関東に伝えた流域文化が全国に伝えられたのだ。

群馬県倉賀野と木崎を中心としたフィールドワークは、さらなる関心を喚起し、次の課題に取り組む所存である。ひとつは流域文化圏の研究として、飯盛の女たちの信仰である。こうした女性たちの地蔵と稲荷信仰は、関東一円で水上交通の守り神として信仰されてきた大杉信仰とダブルスタンダードだったのではないかと考えている。もうひとつは、江戸時代の周縁化した構造化した公娼・準公娼・私娼制度が現代に与える影響である。曾根は「日本近世社会において、公認遊郭＝明確な公娼制は、ある意味で制限されたと言えるが、その公娼制の周縁部分は逆に、岡場所・新地・花街などとして肥大化していくことになった。日本において、近世の公娼制と近代の公娼制は、外圧による検閲制の導入を機に大きな変化を見せる。しかし、近世を通じて見られる公権力の側の対応と、公娼制の周縁部分の肥大化は、引き続き近代以降の問題でもあったのである」と述べている（曾根 2003：200）。本研究では引き続き利根川下流を中心に河岸に形成された遊郭や準公娼地の盛衰と現代に与える影響をフィールドワークしながら研究を進めたい。

## <書誌事項>

栗津キヨ、『光に向かって咲け一斎藤百合の生涯』、岩波新書、1986年。  
五十嵐富夫、『飯盛女 宿場の娼婦たち』、新人物往来社、昭和56年（1981年）。

宇佐美ミサ子、『宿場と飯盛女』、同成社、2000年。

『宿場の日本史 街道に生きる』歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、2005年。

榎本正三、『女たちと利根川水運』、嵩書房出版、1992年。

川名登、『河岸に生きる人びと 利根川水運の社会史』、平凡社、1982年。

佐久間惇一、『瞽女の民俗』、岩崎美術社、1983年。

鈴木昭英、『瞽女 信仰と芸能』、高志書院、1996年。

下重清、『<身売り>の日本史 人身売買から年季奉公へ』歴史文化ライブラリー、吉川弘文館、2012年。

曾根ひろみ、『娼婦と近世社会』、吉川弘文館、2002年。

高崎経済大学附属産業研究所編、『利根川の治水略史』『利根川上流地域の開発と産業 その変遷と課題』、日本経済評論社、1991年。

Human Rights Watch, “OWED JUSTICE – Thai women trafficked into debt bondage in Japan”, Human Rights Watch, New York, 2000.

## <注>

- 1 「高崎倉賀野巡り 倉賀野河岸」 <http://hayakura.com/kasi.html> (2014年5月3日アクセス)
- 2 千葉県立閩宿城民族博物館展示資料「織物業と水運」および「製茶業と水運」より (2014年8月16日訪問)
- 3 茨城県 HP 「いばらきもの知り博士」 「日本で初めて海を渡った茨城県猿島茶」  
<http://www.pref.ibaraki.jp/hakase/info/08/index.html> (2014年5月4日アクセス)
- 4 千葉県立閩宿城民族博物館展示資料「醤油醸造業と水運」より (2014年8月16日訪問)
- 5 「寛 道中旅籠屋之食売女、近年撰二おおきに有由二候、向後、江戸拾里四方之道中筋には、古来之通り旅籠屋老軒二付、食売女式人宛之外、堅差置申す間敷候、拾里外之甲虫筋旅籠屋も右に準し可申候」(宇佐美 2005: 117)
- 6 日光例幣使街道とは、京都から日光東照宮へ幣帛を奉納する勅使が通った道で、倉賀野を起点として13宿(倉賀野、玉村、五料、柴宿、木崎、太田の上州五宿と、八木、梁田、天明、犬伏、栃木、合戦場、楡木の八宿)からなる。「元和3年(1617)、徳川家康の靈柩が日光山に改葬されたが、その後正保3年(1646)からは、毎年京都の朝廷から日光東照宮への幣帛(へいはく)を奉納する勅使(例幣使という)がつかわされた。その勅使が通る道を例幣使街道と呼んだ」。栃木市観光協会 HP 「例幣使街道」 <http://www.kuranomachi.jp/spot/kuranomachi/reiheishi/> (2014年5月4日アクセス)
- 7 井戸八幡宮にある倉賀野河岸の歌の碑 「上州高崎倉賀野めぐり」  
<http://hayakura.com/kasi.html> (2014年5月4日アクセス)
- 8 土木学会関東支部新潟会 HP 「にいがた土木構造ものがたり」  
<http://www8.ocn.ne.jp/~hnnihon/introduction/article/005/art005.html> (2014年5月10日アクセス)
- 9 「日本一の大河 もっと知ろう 信濃川 千曲川」 HP 「水害の歴史」  
<http://www.hrr.mlit.go.jp/shinano/367/disaster/index.html> (2014年5月10日アクセス)
- 10 越後の山間地を襲う飢饉がどれほどむごいものだったのかの一端は、現新潟県津南町の秋山郷では、江戸時代の天明3年(1783年)、天保7年(1836年)の大飢饉では、4つの村が全滅し、他の村でも壊滅的な打撃を受けた。そのとき、小千谷市で酒造業を営む第21代佐藤佐平治が私財を投げ打って秋山郷などの村に、先代から蓄え続けた粃や稗1200表(1080石)、昆布1万把を与えたという「佐平治の心を今の世に」 <http://www.saheiji.com/saheiji-1.html> (2014年5月5日アクセス)
- 11 給金の金額も「蒲原口説」の5525両(榎本)と「木崎節」525両(宇佐美)では違っているものの、年季2年から10年と言われる給金から見ると525両が正しく、5525両は誤植ではないかと思われる。
- 12 群馬県太田市ホームページ「木崎音頭」  
<http://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0170-009kyoiku-bunka/bunmazai/nittabunka12.html> (2014年5月4日アクセス)
- 13 新潟県十日町市ホームページ「新保広大寺」 <http://www.city.tokamachi.lg.jp/page/10170200044.html> (2014年5月4日アクセス)
- 14 栃木県桐生市ホームページ「八木節の由来」(2014年5月4日アクセス)  
<http://www.city.kiryu.gunma.jp/web/home.nsf/0/d5008f957ca1cae749256b6d000edcba>

※本報告書は、国際学部附属研究所共同研究「流域文化圏形成の研究」の中間報告書である。